

古墳の世界観と水

“Water” in the Worldview of Kofun Burial Mounds in Protohistoric Japan

松木武彦

MATSUGI Takehiko

はじめに

①本論の方法と目的

②古墳に埋め込まれた水の表象

③水の表象と古墳の時間的変化

おわりに

【論文要旨】

古墳の形と要素がしめす意味を具体的に復元するために、本論では「水」の表象に着目して、認知考古学的検討を行った。古墳に埋め込まれた水やその表象の変遷を、(1) リアルな水、(2) ヴァーチャルな水、(3) 水と関連する造形、(4) 水との空間関係、の4項目に分けて、主として考古学的コンテキストからの類推によってあとづけた。その結果、古墳がしめしていた意味の変化を、次のように明らかにした。まず、紀元後1～2世紀（弥生時代後期）には古墳の前身である周溝墓が「堀をうがち」「田を拓く」表象と行為を抱いた。3世紀前半に周溝墓が纏向型前方後円墳に発達する上で「水をまつる」表象と行為を加えた。3世紀中葉～4世紀中葉に定型化する大型前方後円墳は「山」の表象と化して「水」の表象もまたそこに階段化された。4世紀後半から5世紀には「水」の表象と行為は広域化し、「山」としての墳丘に至る経路を表現した。最後に6世紀には朝鮮半島の古墳と意味が同一化して、それまでの意味の変化プロセスは停止した。

【キーワード】 認知考古学、前方後円墳、表象、スキーマ、スクリプト